《研究ノート》

周作人とH・S・タッカー
——立教大学におけるギリシア語学習とギリシア文学・キリスト教との出会い——

（山梨大学非常勤講師）根岸　宗一郎

Ⅰ．はじめに

1906年（明治39年）8月に日本に留学した周作人は，法政大学の予科を経て，立教大学でギリシア語の学習を始める。周作人がギリシア文学の翻訳をライフワークとし，その出発点は立教大学におけるギリシア語学習であったことは拙稿『周作人とギリシア文学——1921年における転回を中心に』[1]で既に述べた。本稿では，周作人の立教大学におけるギリシア語学習とギリシア文学最初の翻訳，更にはキリスト教との関わりについて，立教大学図書館大学史資料室の協力による調査に基づいて論じようというものである。

Ⅱ．立教大学におけるギリシア語学習

周作人は，清国留学生会館[2]の講習班で1年間日本語を勉強した後，1907年9月に，清国留学生のため新設された法政大学の予科班（修業年限1年）に入学したと考えられる[3]。留学生のための予科は，大学進学に必要な一般教養科目と日本語の教育を行うものであった。江南水師学堂で一般教養科目を修めてきた周作人は日本語と日本史以外出席する必要もないので，授業は欠席がちであったという[4]。法政大学の発行していた雑誌『法学志林』第十巻第八号（1908年7月20日）の「記事：学年試験成績表」の「清国留学生予科卒業生」欄に優等生として周作人の名が挙げられている[5]。従って，周作人は1908年7月に清国留学生予科を卒業したことが確認できる。

周作人の回想によると，法政大学の予科卒業後の1908年秋から立教大学でギリシア語の勉強を始めたという。『希臘擬曲』「序」[6]（1934年）では次のように述べている。

「1908年から古代ギリシア語の勉強を始めた。読んだものはクセノフォンの『アナバシス』[7]とプラトンの問答であった。」

また『知堂回想録』「八二：学希臘文」[8]（1970年）によると次のように述べている。

「伍舎に居住した期間には，さらに二つの特筆すべき事がある。一つはこの年（1908年）の秋，ギリシア語の勉強を始めたことである。（中略）これ（立教大学：筆者）は米国の教会学校で，校長は姓をタッカー（Tucker）といった。教科書として使ったのはホワイト（懐徳）の『初歩希臘文』で，その後に続いたのはクセノフォンの『アナバシス』であった。」

しかし，今回，立教大学図書館大学史資料室に学籍簿・成績簿を調査していただいた結果[9]，周作人は1908年（明治41年）7月に法政大学清国留学生予科を修了し，1909年（明治42年）4月に立教大学商科予科に入学，1911年（明治44年）4月に同科を退学していることが判明した。また，成績は1909年度（明治42年度）の第2学期，文科選科の希臘語に非常に高い成績が残されているのみで，他の学期・科目には全く成績は残されていないことも分かった。1907年（明治40年）の私立立教学院立教大学学則第6条は，「本大学ハ文科本科生及予科生中兼修希望者ノ為メニ特ニ希臘語，聖書，神学，基督教倫理学，社会学ノ科目ノ講坐ヲ設ク」となっている。従って文科選科の希臘語とは，予科生が選択履修できる科目であったことが分かる。

周作人がどういう理由で文科ではなく商科の予科に入学したのかは不明だが，商科の授業には出

席せずに専らギリシア語の授業だけに出席したと考えられる。

では文科選科の希臘語の授業はどういうものであったか。『立教学院学報』第参号（1908年12月，立教学院）によると附録「現教職員住所姓名：二，大学部教職員」の項に，「総理，（希臘語，英語）エツチ，エス，タツカー」とある。他の教員で希臘語担当者は見られないので，1908年度の希臘語の授業は立教学院の総理であったタッカーが担当していたことが分かる。また，『立教学院学報』第四号（1909年12月）の「校報：学院の現況：六，教員宿所：大学部」の項に「総理（希）エツチ，セント，ジヨージ，タツカー」とあるので，1909年度もタッカーが希臘語を担当していたことも分かる。さらに同第四号「校報：学院の現況：一，大学部」の項に次のような記述が見られる。

「希臘語は文科第二の特色である。予科本科打ち通じて毎週三時間。講師はタツカー総理である。今の二年生は已にゼノフオンのアナバシスを読んで居て，来学年にはプラトーかアリストールを読むと云ふ事である。」

この記述は，「読んだものはクセノフォンの『アナバシス』とプラトンの問答であった。」という周作人の回想と完全に一致する。従って，周作人がタッカーのギリシア語の授業に出ていたことは間違いあるまい。

立教大学学則（1907年）によると，本科は第一学期が9月11日～12月31日，第二学期が1月1日～3月31日，第三学期は4月1日～9月10日となっている。従って，『アナバシス』は2年生の第一学期の授業に当たる。「来学年にはプラトーかアリストールを読む」とあるのは文字通り3年生に上がる翌1910年9月からを指すと考えられるが，1910年1月からの第二学期のつもりで言っている可能性もある。

周作人は予科の学生であったから，授業の進み方も本科生とは異なっていたとも考えられる。予科の修業年限は1年半で，第一学期が4月1日～12月31日，第二学期が1月1日～9月10日である。従って，周作人の1909年度（明治42年度）文科選科第二学期の成績とは，予科の第二学期である1910年1月から9月に開講されたギリシア語の授業のものであろう。タッカーの自伝“Exploring the silent shore of my memory”[10]（1951）第13章の1909年の部分で，立教大学で週に9時間ギリシア語を教えていたとタッカーは述べている。『立教学院学報』第四号の記述から本科・予科ともにギリシア語の授業は週3時間と分かるので，1909年にはタッカーは週に3つのクラスを持っていたと考えられる。『立教学院学報』第三号（1908年12月）「校報」の「学院の現況：一，大学部」によると，「立教大学：目下のところ本科が文科と商科で二組，予科の方が一組と，都合三組の学生は合せて未だ五十名に充たず」とある。従って，1908年9月からの文科選科のギリシア語の授業は予科と本科のクラス合わせて2クラスであった。立教大学の最初の学生が1907年9月入学であるから，本科は文科・商科とも1年生と2年生がいたはずであるが，少人数のため1年生・2年生は合同クラスとなっていたのかもしれない。すると，1909年9月からの学期のギリシア語の授業は予科生・1年生，及び2年生と3年生の合同クラスという3クラスがあったはずで，回想どおりタッカーは週3時間のクラスを3つで計9時間教えていたことになる。

周作人が履修したタッカーの予科のギリシア語クラスは第1学期が1909年4月から12月，第2学期は翌1910年1月から9月ということになる。しかし，タッカーの自伝によるとタッカーは1908年12月27日から翌1909年6月初めまで，立教大学の新キャンパス（現在の池袋キャンパス）の土地購入資金の援助を要請するためアメリカに行って留守であり，ギリシア語の授業は代役がいないため休講となっていたことが分かる[11]。従って，1909年度第一学期のギリシア語の授業は，6月初めのタッカ

一帰国から夏期休業（7月26日～9月10日）を挟んで12月31日までということになり，夏期休業以前は僅か1カ月半しかないので授業が行われなかった可能性もある。もし1909年9月からギリシア語の授業が始まったとすると，周作人の「1908年秋から」という回想は，1909年秋の記憶違いということになる。いずれにしても，予科のクラスでは1909年9月は初等文法を授業で扱っていたことは確かである。現在日本の大学ではギリシア語の初等文法を週1時間半で1年かけて教えるのが普通である。当時の立教大学では週3時間授業があるので半年で初等文法を終えることが可能であったと考えられる。すると9月から初等文法の授業を始めたとして，翌年3月には初等文法が終わり，現在の中級の授業に当たる『アナバシス』などの講読に入ることができたであろう。

授業のテキストは周作人は「懐徳『初歩希臘文』」と回想していることから，John Williams White[12] "The first Greek book"（Boston；New York：Ginn, 1896）を初等文法のテキストとして使用したと考えられる。また，『アナバシス』のテキストは，同じJ. W. WhiteとWilliam Watson Goodwinの共著 "The first four books of Xenophone's anabasis：with notes, adapted to Goodwin's Greek grammars"（Boston：Ginn and Heath, 1879）を用いたかも知れない[13]。このテキストは初等文法を終えた学生向けに『アナバシス』の最初の四章の原文の後に，読解の手助けとなるように本文の1.5倍ほどの分量の註が付けられている。分量的には，週3時間の授業で読むと半年以上1年弱かかると推測される。これとは異なる『アナバシス』のテキストを使ったとしても『アナバシス』全文を読むことは分量的に不可能なので，本科の2年生の授業も周作人が出席していた予科の授業も抜粋して読んだことは間違いない。予科の授業であるから，本科と同じテキストを使いながら若干分量を本科よりも減らして読んだことも考えられる。従って1910年4月あたりから7月まで『アナバシス』の講読を行い，9月からはプラトンの講読を行うということは十分に可能であった。周作人は1911年4月に立教大学商科予科を退学しているので，それまでの間に初等文法から中級のクセノフォン『アナバシス』やプラトンの講読をタッカーにみっちりと指導されたと言えよう。

ここでタッカーという人物について触れておきたい。立教大学図書館大学史資料室提供の立教学院諸聖徒礼拝堂で挙行された追悼式の『元立教学院総理H・S・G・タッカー主教記念追悼式』（1959年9月22日）というパンフレットによると略歴は次の通りである。

ヘンリー・セント・ジョージ・タッカー（Henry St. George Tucker）は，1874年7月16日，アメリカ合衆国ヴァージニア州リッチモンド区ワーソー村に生れる。1895年6月，ヴァージニア大学卒業。1899年6月，ヴァージニア神学校卒業。直ちに執事按手を受ける。更に7月には司祭按手を受け，10月来日。1900年，東京三一神学校教授に就任。1901年仙台聖公会に赴任。更に同年12月弘前に派遣され，弘前昇天教会，青森聖アンデレ教会及び八戸聖公会の管理司祭となる。1903年4月，立教学院総理に迎えられ，立教中学校英語科教諭及び東京聖三一神学校別科教授を兼務，更に東京諸聖徒教会を司牧する。爾来当時の立教中学校長元田作之進氏（後の立教大学学長，東京教区主教）と協力し，立教学院発展の基礎を築いた。1909年，志成学校（清国留学生の教育を目的とする）の校長，及び土浦聖公会の管理司祭を兼務する。1912年3月，京都聖三一教会において日本聖公会京都地方部主教に聖別され，そのため立教学院総理を辞任する。第一次世界大戦中の1918年8月，主教職のまま米国遠征軍の陸軍少佐として米国赤十字社のシベリアにおける避難民救済業務に従事した。この避難民とはコサック兵などロシア革命による逃亡者たちである。1923年5月，京都地方部

主教を辞して帰米し，ヴァージニア神学校教授に就任。1926年，ヴァージニア教区副主教に選任される。1927年，ヴァージニア教区主教に昇格。1937年4月，日本聖公会組織成立五十年記念大会に米国聖公会代表として来日。1938年，米国聖公会総裁主教に選出される。1946年12月31日，総裁主教を退任。1951年，ヴァージニア州リッチモンドのウィテット・アンド・シェパーソン社（Whittet & Sheperson）から自伝『静かなる思い出の岸辺に』（Exploring the silent shore of memory）を出版。1959年8月8日，ヴァージニア州リッチモンドにおいて85歳で逝去。

以上がタッカーの略歴であるが，日本，アメリカの聖公会の要職を歴任していることが分かる。周作人が授業に出ていた1909・1910年は，タッカーは立教学院の総理であり，日本における聖公会の要職である主教に昇格する直前であった。周作人は一介のギリシア語教師ではなくキリスト教布教のアメリカ人要人にギリシア語とギリシア語聖書を習っていたのである。

Ⅲ．ギリシア語聖書の学習

周作人は古典ギリシア語を勉強した動機をギリシア語聖書の翻訳のためと回想している。『希臘擬曲』「序」（199頁）では次のように述べている。

「私の目的は『新約』，少なくとも『四福音書』を訳そうと思ったからである。当時も私はキリスト教徒ではなかった。しかし，1901年から江南水師学堂の学生であったとき，おそらく一番上のクラスの先輩胡詩廬先生の指摘を聴いて，『聖書』を優れた文学として非常に重視した。同時にまた楊仁山先生の影響でいくつか仏教経典，特に『楞厳経』と『維摩経』を読み，それから向きを変えて聖経会の出していた『文理』訳本を読むと，何とも言えずつり合わない感じをいつも受けた。」

また『知堂回想録』「八二，学希臘文」（220頁）では次のように述べている。

「私は南京学堂にいた頃，二学年上の胡朝梁（これが彼の本名で，後に詩人になり胡詩廬と名乗るようになった）の議論を聴いた。それは『聖書』の文学性を強調し，英語を勉強した人はこれを読まざる可からずと言っていた。1611年にイギリス国王の欽定になるこの訳本はすばらしいものである。しかし私は中国語訳の聖書を読むと，白話本なら言うまでもなく，古文を使って書いてあるのに奥ゆかしさが足りない感じが常にし，仏典とは較べものにならないのである。」

そこで周作人は，厳復がハクスリーを諸子百家のように訳し，林紓がスコットを司馬遷のように訳したように，自分は『新約聖書』の少なくとも四福音書を仏典のような古風で雅やかな文章に翻訳したいという野心を抱いたという。

『新約聖書』が書かれているギリシア語はヘレニズム時代の共通語としてのギリシア語コイネーであり，古典ギリシア語として学ぶアッティカ方言とは多少異なる。そこで周作人は立教大学と関係のあった「三一学院」または「三一書院」にギリシア語聖書の講読に通っている[14]。『知堂回想録』「八二，学希臘文」（220頁）では次のように述べている。

「ただし私は正当な古文（アッティカ方言：筆者）をそれほど重視していたわけでなく，時々立教大学と関係のあった「三一学院」にギリシア語の『福音書』の講義を聴きに行った。」

また『希臘擬曲』「序」（199頁）には次のようにある。

「一方でアテネの哲人の雅やかな言葉を読みながら，また時々は三一書院にこっそり行って『ルカによる福音書』の講義を聴講した。」

ここで「三一学院」または「三一書院」と周作人が述べているものについて，今回筆者は立教大学図書館大学史資料室の協力を得て調査することができた。その結果，「三一学院」・「三一書院」という名称の施設・機関は存在せず，これらに相

当する可能性があるのは志成学校か三一神学校であることが分かった。

志成学校は，急増する清国留学生の教育を目的として立教学院（立教大学の母体）が1906年に設立したもので，立教学院築地キャンパス内の三一会館を教場とした。従って「三一学院」・「三一書院」と一般に呼ばれた可能性はあり，また周作人がそう思いこんだ可能性もある。しかし，『立教学院史資料室たより』（第4号，1979年5月，立教学院史資料室）の伊澤平八郎「新史料紹介（その三)」に紹介されている，明治40年2月14日にタッカーが東京府に提出した「私立志成学校設立願」から次のことが分かる。

設立目的は「清国留学生ノ男子ニ普通学ヲ教授スルヲ以テ目的トス」。修業年限は3年で，開講科目は「倫理・日語・英語・数学・博物・理化・図画・体操」となっている。従って，ギリシア語聖書の授業は開講されておらず，志成学校は清国留学生が日本の大学を受験するための予備校であったことが分かる。無論日曜など授業外の時間に聖書の教育を施していた可能性を完全に否定はできないが，周作人が志成学校でギリシア語聖書の授業を受けた可能性は低いのではないか。

志成学校の他に，「三一学院」・「三一書院」と呼ばれた可能性のある機関は，三一神学校である。もともと立教学院は三一神学校に学び聖職者を目指す学生を養成するために設立されたものであるから，三一神学校は立教学院の母体と言える。敷地も築地の立教学院の向かいにあり[15]，教員も重複していた。『基督教週報』第十八巻第八号（1908年10月23日，基督教週報社，編集者：元田作之進）の「東京聖三一神学校の今昔（承前)」に次のような記事がある。

「新講座：東京三一神学校従来の規則は，明治三十七年六月，文部省専門学校令に準じて改正され，専門学校として文部大臣の認可を受け，又徴兵猶予の特典に就ては，陸軍大臣の認可を受けた。（中略）学課目の上にも改正の必要は認められ，三十九年度からは，心理学，論理学，社会学，哲学史，希伯来語，希臘語等を新たに加へて，中学卒業程度の学力と神学研究に取かかる間の連鎖をつくる事になった。受持は希臘語がタッカー教授，希伯来語が其年再任された教授落合吉之助氏，心理学は滝野川学園長石井亮一氏，論理学社会学及び哲学史は博士元田作之進氏。」

当時タッカーは立教学院総理，元田作之進は立教中学校長であり，タッカーは三一神学校でもギリシア語を教えていたことが分かる。この記事では更に修業年限等について次にように述べている。

「修業年限の上にも改正行はれ，全課程五個年，これを二分して前期二年，後期三年とし。前期には右列挙した学課目外には，後期に入りて学修すべき神学の道案内となるべき神学部門の一二と，充分英語の素養を作る方針になつてをる。後期に入りては，従来四個年で修めた神学各部門を三個年間に修了するやうな時間割となり，（後略)」

この後「行はるべき将来の変更」の節に次のような記述がある。

「所が，去春に新たに立教学院に，私立大学部が開設され神学の予備学課は，悉く右大学の方に編入されてをるので，将来神学校の学制上にも，自然変化が生じて来るに相違ない。」

この記述から1908年春に三一神学校の前期課程に開講されていたタッカーのギリシア語が，立教大学の方に編入されたと考えられる。また，三一神学校と立教大学との間に授業の履修で学生の行き来もあったことが想像される。

タッカーの自伝第11章「立教学院の大学部の開設：1906年4月－1907年」（126頁）では三一神学校でのギリシア語の授業について次のように述べている。

「他に頼まれる人がいなかったため，私は（三一神学校の：筆者）ギリシア語の新約聖書の教授

にされた。これは初級のギリシア語の基礎講座を意味していた。なぜならこの言語の知識を有する学生が一人もいなかったからである。この実験はそれほど成功したものではなかった。とはいえ二，三の特に優秀な学生はギリシア語のテキストに基づく注釈書を扱えるほどにこの言語を身につけはしたが。」

続けてタッカーは次のように述べている。

「翌年，新たに開設されたセントポール大学部（立教大学の英語名：筆者）のギリシア語クラスでは遥かに良い成果を収めた。ここの生徒たちはより若く，またこの言語の基礎を完全に訓練させる時間があった。」

この記述から見て，1908年度（明治40年度）からはギリシア語講座は三一神学校から立教大学の方に編入されていたと言えよう。更にタッカーの自伝第13章「立教学院の新敷地の購入：1909年－1910年」（147頁）には次のような記述がある。

「大学では私はギリシア語を週に9時間教え，進化論及びそのキリスト教との関係について講義をし，神学校では8時間ギリシア語の聖書と神学を教えた。」

これにより，1909年から1910年にかけて三一神学校でタッカーによるギリシア語聖書の授業が行われていたことが分かる。先述のように立教大学と三一神学校の学生との間に授業の履修で行き来があったとするならば，周作人が，立教大学でギリシア語を教わっているタッカーのギリシア語聖書の授業を聴きに三一神学校へ行ったとしても不思議はないのである。従って，周作人が「三一学院」・「三一書院」と書いている機関は三一神学校であったと考えてほぼ間違いないであろう。

ギリシア語聖書の授業を聴きに神学校に出入りしたことから考えて，当時の周作人のキリスト教に対する意識には，聖書の「文学性」を重視したという以上のものがあったのではなかろうか。タッカーが司祭の地位にある聖職者であり，立教学院を拠点に日本におけるキリスト教（プロテスタント）布教を進めていた人物であったことからも，周作人が当時キリスト教に対し信仰に近いような意識を持っていたとも推測されるのである。後年，周作人は1920・21年にキリスト教について多くの文章を発表し，『山中雑信，六』[16]（『晨報副刊』1921年9月6日）では「中国の人心を一新するにはキリスト教が実に適当だと思う」と述べるまでに至る。翌1922年，中国で共産党主導の非基督教運動が起こった際に周作人が信仰の自由の立場からキリスト教擁護に回り，民族主義者たちの攻撃の矢面に立つことになる[17]。この伏線は日本留学中の立教学院での学習から始まっていたのではないだろうか。『知堂回想録』（1970年）「一三三，文学与宗教」（396－397頁）で非基督教運動に抗議した当時を振り返って，共産党に対する自己弁護的ニュアンスで次のように述べている。

「もともと私は宗教を信じない人間であり，宗教が阿片であることも知っていた。しかし，どういう訳かずっとその阿片の香気が忘れられず，それが時には病を癒すこともあると思っていた。」

この言葉はむしろ，周作人が日本留学中にタッカーのもとでキリスト教信仰の体験，一時的なりとも神を信じる心を持ったことを物語っているのではあるまいか。周作人がタッカーから受けた影響の一つは，少なくとも一時的にキリスト教に対する信仰心を感得したことではないだろうか。

Ⅳ．ギリシア文学翻訳の出発点

周作人がタッカーから受けたものはキリスト教の感化に止まらなかった。周作人の最初のギリシア文学の翻訳は1914年10月『中華小説界』第1巻第10期に掲載した『希臘擬曲二首』（ヘーローダース）であるが，この前書きに次のようにある。

「私がこれを訳すのに，我が師の米国泰克氏に大きな助けを受けた。謹んで感謝の意を表したい。」

この米国の「泰克氏」とはタッカーと考えられる。この翻訳が発表されたのは周作人帰国後の1914年であるが，翻訳が為されたのは日本留学中のことであったと思われる。『墨痕小識』[18]（1919年）に次のような記述がある。

「庚戌十二月，麻布森元町に居を定める。『黄華』（Jokai Mor：A Sarga Rozza）を訳す。『紹興公報』のために『アンデルセン伝』，希臘『擬曲』，Ephtaliotis著『ロシノス』を執筆。」

庚戌とは1910年であるから，ちょうど周作人がタッカーの授業に出ていた時期である。『紹興公報』のために書いたという希臘『擬曲』は，結局同紙には掲載されず，帰国後の1914年に『中華小説界』に掲載することになったと考えられる。『周作人日記』[19]1914年4月30日の項には，「午後，『希臘擬曲』を書き写し，『小説界』に示す予定。」とある。日本留学中に書いた訳稿を帰国の際に持って帰り，暫く寝かして置いたものを『中華小説界』に投稿するために清書したのだと推測される。

この『希臘擬曲』はヘレニズム時代紀元前250年頃の作家ヘーローダースの作品であり，『中華小説界』に発表したのは『取り持ち婆』と『塾の先生』の二篇の文言訳である。この後，周作人は1922年1月1日『晨報副刊』に『取り持ち婆』を白話文に改訳して発表し，1925年には『語糸』11期に『密談』を，1930年7月から9月にかけて『駱駝草』に『嫉妬深い女』，『塾の先生』，『売春宿の主人』，『アスクレーピオスに奉献し犠牲を捧げる女達』を発表している。そして1934年1月，ヘーローダースの擬曲全七篇をテオクリトスの牧歌五篇とともに1冊にまとめ『希臘擬曲』として上海商務印書館から出版している。つまり，ヘーローダースの擬曲への関心は20年以上も持続し，周作人のギリシア文学への関心の大きな部分を占めていたと言えるが，このヘーローダースの擬曲との出会いはタッカーによってもたらされたものだったのではないか。周作人はヘーローダースの擬曲の翻訳に当たって翻訳対象の選択及び翻訳の仕方などについてタッカーの教えを受けていたと考えられ，タッカーが周作人に与えた影響の大きさを物語っているのではないだろうか。

周作人がタッカーの助力を得て1910年にヘーローダースの『擬曲』を翻訳した際，どのテキストを底本に用いたのかは現在のところ確定はできない。1934年に刊行された『希臘擬曲』の「例言」[20]に参考文献として挙げられている中で，出版年から日本留学中に入手した可能性のあるものは次の2冊である。J. A. Symonds "Studies of Greek Poets"（3rd ed.1893），Charles Whibley "Studies in Frankness"（1898）。この2冊にはヘーローダースの擬曲七篇の全英訳が収められているが，ギリシア語原文は収められていない。また，『中華小説界』に掲載された周作人の訳文と対照すると，ト書きの部分が対応しないので，周作人がこの2冊の他に主に依拠したテキストがあったことは確かである。タッカーの助力があったとすればギリシア語の原文から翻訳した可能性もあり，英訳本は対照する程度に用いたのであろうか。

1930年7月『駱駝草』10期に周作人はヘーローダースの『嫉妬深い女』の翻訳を掲載するが，この後記で次のように述べている。

「六年前に出た『陀螺』に二篇（ヘーローダースの擬曲：筆者）を収めたが，これは英訳本に基づいた重訳であった。今回はケンブリッジ，オックスフォード両大学の原文テキストを比較しながら訳出した。またシモンズ，クラーク，ヘッドゥラムの諸英訳を参考にしたので，或いは比較的正確なものになったかも知れない。」

1925年刊行の『陀螺』（新潮社）に収録されたのは『取り持ち婆』と『密談』の二篇で，前者は1914年10月『中華小説界』第1巻10期に文言訳で発表し，更に1922年1月1日の『晨報副刊』に白話文に訳し直して発表したものである。従って，『陀螺』に収録された二篇が英訳本からの重訳で

あるとすると，『中華小説界』に発表した文言訳，即ち1910年にタッカーの助力を得て行った翻訳も英訳本からの重訳であったとも考えられる。しかし，1934年刊行の『希臘擬曲』「例言」（204頁）に次のような記述がある。

「ヘーローダースの原文テキストで今回用いたものには二種類ある。一つは1904年J. A. Nairne編のオックスフォード本，もう一つは1922年A. D. KnoxがW. Headlam原編版を重訂したケンブリッジ本である。（中略）参照した英文の訳本は，ヘーローダースにはJ. A. Symonds, R. T. Clark, Knoxの各本がある。」

Nairne編のオックスフォード本が1904年刊行であることから，このテキストを日本留学中にタッカーを通じてか，または自分で丸善を通じて入手できた可能性もある。翻訳にタッカーの助力を得たと言うからには，ギリシア語の授業の延長で周作人がギリシア語原典のテキストから翻訳するのをタッカーが手直ししたという方が文意として自然なのではないか。

ヘーローダースの擬曲は1891年にエジプトで発見されたパピルスの中に含まれていたもので，オックスフォードやケンブリッジの学者の翻刻により初めて現代人の目に触れるようになったものである。パピルスにはほぼ完全な形の擬曲七篇と断片が含まれており，1910年の時点ではギリシア語のテキストや英語・ドイツ語などの翻訳テキストが出回っていた。発見から20年弱であり，話題性もあったのでタッカーが授業の中でギリシア語のテキストを紹介したとも推測できよう。

周作人が日本留学中，立教大学において出席した古典ギリシア語の授業は，タッカーという日本におけるキリスト教（プロテスタント）布教の要人との出会いを生んだ。周作人のキリスト教理解はタッカーのもとでの宗教体験を通じて大きく深化し，後年に至るまでキリスト教理解の基礎となったと考えられる。一方で，タッカーを通して周作人はギリシア文学の世界に足を踏み入れ，特に後年まで関心を持ち翻訳を続けたヘーローダースの擬曲と出会うことができたのである。ここにギリシア文学の翻訳紹介者としての周作人の出発点があり，更にはギリシア文学と聖書，即ちヘレニズムとヘブライズムという西洋文化の源流を学び取ろうとする周作人の西洋文化受容の姿勢が浮かび上がっていると言えよう。

最後に，立教大学における調査の成果はひとえに立教大学図書館大学史資料室の池田貞夫先生のご協力のお蔭である。ここに心から感謝申し上げたい。

[注]

(1)『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第3号，東京大学文学部中国語中国文学研究室，2000年4月，所収。

(2) 范源廉，曹汝霖，蔡鍔，章宗祥が中心となり，駐日公使その他の援助の下に1902年設立。場所は神田区駿河台鈴木町18番地，現在の駿河台2丁目3番地。会議場，演説場などとしても利用される留学生の総合的機関であり，日本語講習会も行われていた。テキストは『東語簡要』（細川小三郎著・発行）を使っていた（さねとうけいしゅう『中国人日本留学史』増補版，くろしお出版，1970年，195－199頁による）。

(3) 法政大学では急増する清国留学生のため1904年（明治37年）5月に法政速成科を設けた。修業年限は1年半（明治37年11月以前は1年）で，中国語の通訳付きで法学を中心に学ぶコースであった。1906年9月入学の第五班は法律部と政治部の二部に分かれ，合計入学者数は過去最高の844名であった。同年8月には速成科の卒業生を専門部第2学年に編入することが認可されている。速成科は第一班から第五班までの卒業生を出し，1911年（明治44年）4月に募集を停止

している。一方，1907年（明治40年）2月，清国留学生のための普通学の教育を目的とする普通科の新設が認可され，8月からは清国留学生のための予科が新設されることになった。この予科は修業年限が1年，授業科目は日本語と普通学（修身・国語・外国語・歴史・地理・数学・博物・理化学・法政経済・唱歌・体操）で，予科修了後専門部第一学年に入学できるものであった（以上，『法政大学百年史』法政大学大学史編纂委員会，1980年，第一編「通史：2，法政速成科の開設」166－180頁による）。

周作人は『知堂回想録』「七二：学日本語」（193－194頁）で次のように述べている。

「（中華留学生会館の：筆者）講習会は私的な組織なので卒業しても学位もなく，学校に入るのにも不便であったから，翌年つまり丁未（1907）年の夏，法政大学の特別予科に入り直した。この予科は期限が一年で，日本語及び英算歴史の簡単な学科を教えるもので，学び終えた後は専門科に入ることができる。もしも大学の本科に入ろうとするならば別にもう一つの予科があり，普通中学の課程を学習し，三年かけてやっと卒業できるものであった。」

『法政大学百年史』の清国留学生予科に関する記述と符合することが確認できる。また，『法学志林』第九巻第九号（1907年9月20日）と第九巻第十号（同年10月20日）の広告欄の法政大学学生募集広告に次のような記述がある。

「○清国留学生：擬陽暦九月初新設予科班（一年畢業）教授普通必須之学及日語以為進入大学部専門部之予備◎細章向本校索閲可也」

この広告にある清国留学生のための予科に周作人は入学したので，入学時期は1907年9月として間違いなかろう。

(4) 周作人は『知堂回想録』（194頁）で，次のように回想している。

「私は一年十分に日本語を勉強しており，また英算等の学科も皆すでに勉強してしまっていたので，聴きに行こうという興味も持てなかった。こうして私のさぼり癖が助長され，一年の学費を払いながら事実上登校した日数はおよそ百分のいくつかだったろう。試験の時期になって，学校の通知を受け取ってやっと試験を受けに行き，結果はそれでも第二位の成績であった。」

(5) 法政大学によると残念ながら周作人在籍当時の学籍簿・成績簿は戦災のため失われてしまったとのことである。『法学志林』第十巻第七号（1909年7月20日）の「卒業試験成績表」の「清国留学生予科卒業生」欄には周作人を含め3人の卒業生の名前が挙げられているが，3人とも優等生を示す二重丸が名前の上に付されている。

(6) 鐘叔河編『周作人文類編8，希臘之余光』湖南文芸出版社，1998年，199頁。『希臘擬曲』（上海商務印書館，1934年）は日本に所蔵がなく筆者未見のため，テキストはすべて『周作人文類編8，希臘之余光』に基づき，テキスト所載頁数も同書における頁である。以下同様。

(7) クセノフォン（前430年頃－前355年頃）は，ペルシア王アルタクセルクセス2世の王位を狙う弟小キュロスの反乱軍に傭兵として参加した。反乱軍はペルシアの都バビロンの近くまで進軍するが，クナクサの会戦で小キュロスが戦死し，クセノフォンの属するギリシア人傭兵部隊一万余は敵中に孤立してしまう。クセノフォンはこのギリシア人部隊を率いて黒海を目指し長途の脱出行を図る。この一連の事件をクセノフォンが回想して記述したものが『アナバシス』全7巻である。

(8) 『知堂回想録』香港，聴濤出版社，1970年7月初版，220頁。以下，引用部分のページ数は同版に拠る。

(9) 立教大学図書館大学史資料室によると，学籍

簿及び成績原簿は立教大学教務部に保管されており，個人のプライバシーに関わる情報なので閲覧は不可とのこと。また，成績の点数などに関しては非公開となっているとのこと。

(10) Richmond, Verginia. Whittet & Sheperson, p.147。

(11) タッカーの自伝には次のようにある。「少しの休みはギリシア語の生徒たちの害にはならないだろうし，大学の計画を作ったからにはそれを実現させるためのお金を集める責任を私が負うべきだと主教様は考えられた。」（第12章「アメリカ合衆国艦隊の訪問」，141頁）。

(12) John Williams White（1849－1917年）はハーヴァード大学のギリシア語教授である。初等文法の著書にはこの他に“The beginner's Greek book”（Boston：Ginn, 1892）があるが，本文が428頁の大部であるので，本文292頁で出版も新しい“The first Greek book”（Boston；New York：Ginn, 1896）の方を用いた可能性が高いと思われる。“The first Greek book”の序文でWhiteは，4年前に出した“The beginner's Greek book”が分量的に大学の授業1年では教えきれないので更に簡略化した教科書が欲しいという要望が寄せられたため新たに本書を編んだと述べている。J. W. Whiteにはまた，同じハーヴァード大学ギリシア文学の名誉教授，William Watson Goodwin（1831－1912年）の“Greek Grammar”（Boston：Ginn, 1892）に準拠した練習問題集“A series of the first lessons in Greek”（Boston：Ginn, 1892）もある。

(13) クセノフォン『アナバシス』第1巻は，小キュロスによる王位簒奪計画の発端から反乱軍のバビロンへ向けての進軍，クナクサにおける小キュロスの戦死まで，第2巻から第4巻までがクナクサから脱出行を行い黒海沿岸への到達までを描く。この第1巻から第4巻までは記録文学として特に名高い部分である。なお，ホワイトの“The first Greek book”では，Lesson13からLesson80までの各課に“READING LESSON”（読解の練習問題）として『アナバシス』第1巻の原文を抜粋して収録している。この練習問題を課を追って読んでいくと第1巻のあらすじが分かるように工夫されている。

(14) 『立教学院学報』第参号・第四号によると，立教大学では日本語の聖書の講義（講師は1909年度が須藤吉之祐，1910年度が元田作之進）しかなかったと考えられる。

(15) 地所は，立教大学が京橋区明石町37番地，三一神学校が同53番地で道路を一本挟んで向かい合っている。また三一神学校のすぐ隣には三一会館（明石町54番地），立教中学校（同57～59番地），立教中学校寄宿舎（同60番地）があり，一帯が立教学院のキャンパスのようなものだったと言えよう（中央区明石町資料室，清水正雄『居留地30年間をとおして見た学校と宗教施設の位置図』1992年5月による）。

(16) 『雨天的書』北新書局，1925年12月初収。『雨天的書』岳麓書社，1987年，137頁。

(17) 周作人と非基督教運動の関わりについては，尾崎文昭『陳独秀と別れるに至った周作人――1922年非基督教運動の中での衝突を中心に』（『日本中国学会報』第三十五集，日本中国学会，1983年10月，所収）に詳しい。

(18) 未刊稿。前掲『周作人文類編8，希臘之余光』所収，520頁。

(19) 『魯迅博物館蔵「周作人日記」』影印本，大象出版社，1996年。

(20) 前掲『周作人文類編8，希臘之余光』所収，205頁。